

古民家の野外博物館

日本民家園だより

平成3年度第2号

《通号第25号》

発行 3.8.1

川崎市立日本民家園

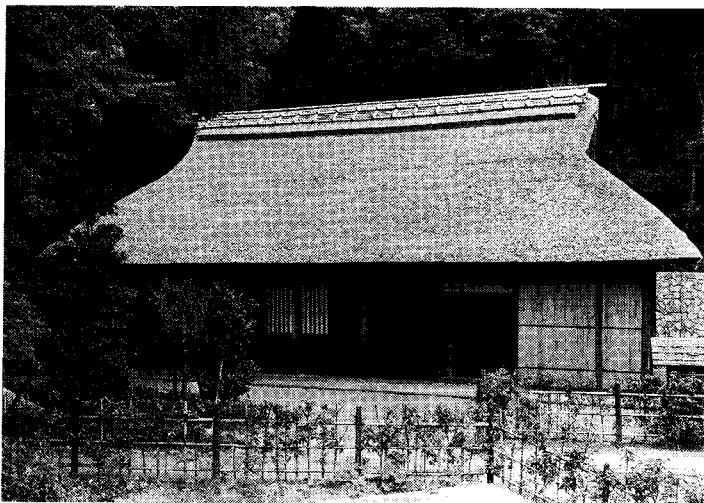
川崎市多摩区枳形 7-1-1

電話 (044)922-2180~1

印刷 (株) エイシン

丹沢山地の民家、旧岩澤家住宅

- ・旧岩澤家住宅
- ・神奈川県指定重要文化財
- ・入母屋造り、茅葺き、平入り
- ・平面積 105.76㎡
- ・旧所在地 神奈川県愛甲郡
清川村煤ヶ谷2046
- ・昭和61年11月 県重要文化財に
指定される
- ・昭和62年4月 岩澤義家氏より
川崎市に寄贈
- ・昭和62年6月 解体工事着手
- ・平成2年3月 移築復原完了



◆ 古い構造様式を伝える山村民家

この家は、神奈川県愛甲郡清川村煤ヶ谷にあった上層農家の住宅です。屋号を「オキ」といい、かつては名主を勤めたこともあったそうです。非常に古い構造様式の建物であること、そして当家の墓地には天和二年（1682）にまでさかのぼる古い墓碑もあることなどから、建築年代は17世紀の終わり頃であると推定しました。

この家がある清川村は、丹沢山地の谷あいに広がった山村で、全体として耕地が少なく、古くから林産物などの生産が生業の中心を占めていました。特に炭焼きは盛んで、通常10月の農作業が終わってから、春蚕の始まる5月初旬まで続けられました。毎朝3時頃松明を持って家を出て、2里も3里も離れた山のオキ（沖）で炭焼きを行い、夜9時か10時頃に帰るという生活だったようです。しかし、この炭焼きも、現

旧岩澤家住宅

在ではすたれてしまい、代わって丘陵斜面を利用してお茶の栽培が盛んとなっています。この家も、旧所在地では背後にお茶畑を背負っていましたが、本園でも復原の際周囲にお茶の木を植え、土間にお茶のホイロを展示しました。

家の間取りは、神奈川県下近世民家にもっとも一般的な広間型三間取りですが、柱位置と構造はすでに県文化財として指定された同時期の民家には見られない古様を示しています。素朴で閉鎖的な外観と、曲がり梁を縦横に組んだ内部は見応えがあり、現在ではほとんど姿を消してしまった旧愛甲郡の山村民家を今に伝える貴重な建物です。

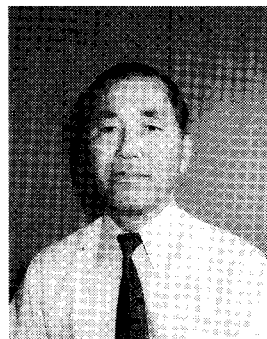
◆ みどころ

- ・土壁と板壁を併用した外壁
- ・デエ奥の押板 ・土間にあるお茶のホイロ

これからの民家園に望むもの

新園長 小野 昊

日本民家園は創立当時あっては建造物の野外博物館を目指し、特に東日本を中心に文化財価値の高い民家を収集し、それを復原・保存にと努力してまいりました。そして20数年の歳月がたち、待望の本館が関係者のご尽力により現在建設中であります。町屋風の建物で生田の緑に白壁が美しくよく似合いそうです。館内には日本の代表的な民家や大工道具を紹介する展示室があり、それをご覧になってから各古民家を見学していただくと民家園の全体がよく理解していただけるようになると思います。



民家園もこの本館建設によって一応建築関係が一段落いたしますので、今後は博物館としての学芸活動に一層力を入れてまいりたいと思っております。現在実施しております「民具の手作り教室」や「民家園まつり」等の諸行事の充実はもとより、古民家に生活の息吹きを感じさせる生きた雰囲気づくり、たとえば囲炉裏やカマドで毎日火をたきながら燻煙し、来園者と親しくお話しをしたり、土間ではその地方の民具等を自由に作れる体験学習ができるよう、また各古民家にはそれぞれのふるさとがありますので、そのふるさとの特色や環境を再現し、四季折々の草花等が観賞でき、来園者の眼を楽しませることができるよう整備し、なお年中行事やまつり等を盛んに取り入れ、来園者にも一緒に参加していただき楽しんでもらえる民家園づくりを目指していきたくと考えております。

みんぎ会へ入会しませんか!/?

◆会の目的と活動

先人が生活の中から手づくりで生み出した民具、そこには機械で作られた物には感じられない良さがあり、温かみがあります。その作り方を正確に習い、後世へ伝えるという目的で民具製作技術保存会（通称みんぎ会）は昭和48年10月に日本民家園の育成団体として発足しました。

現在みんぎ会では、ワラ細工グループ、竹細工グループ、ハタ織りグループに分かれ、手仕事を通じてお互いの技術を伝承し合う活動を民家園内において実施しています。入会資格は特にありませんが、会費が一般会員・年間4000円、学生会員・年間2000円必要です。はじめての方でも入会していただけます。詳しい内容のお問い合わせは、〒214 川崎市多摩区枳形7-1-1 川崎市立日本民家園事務所内、民具製作技術保存会（電話 044-922-2180）までお願いします。あなたも手仕事を通じて、先人の知恵に触れてみてはいかがでしょうか。

◆ワラ細工グループ

手仕事としては、最もポピュラーなものです。グループ員がきわめて多くのものの製作技術を持っているので、各人の技術に応じたものを作ることができます。



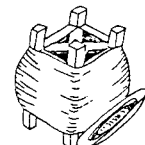
◆竹細工グループ

竹細工は編むのは比較的容易ですが、その前の材料ごしらえが熟練を要します。しかし竹ザル等は今でも日常生活の中に生きているので、最初の困難を乗り越えれば楽しい内容です。



◆ハタ織りグループ

ハタ織りは単純な作業なので誰にでもできます。色や柄のデザインにはじまり、糸の種類、所要量の計算など、センスと技術の両方が要求されます。



8月から10にかけては、“夏休み”そして“行楽の秋”。民家園ではご家族揃って楽しんでいただけるよう、いろいろな催し物を用意して皆様のお越しをお待ち致しております。

◆ 体験学習 - 郷土玩具作り -

竹で、水鉄砲やケン玉などのおもちゃを作ります。お子様の夏休みの思い出に、手作りのおもちゃはいかがでしょう。

- 日時 8/25(日)、午前10時より
- お申し込み 当日入園の方、先着60名様程度
- 会場 旧作田家住宅前

◆ 体験学習 - 十五夜ダンゴ作り -

石臼でお米を挽いて粉にし、その粉で十五夜のお団子を作ります。

- 日時 9/22(日)、午前10時より
- お申し込み 8/18(日)、午前9時より
- お電話(044-922-2181)で先着25名様迄
- 教材費 300円

◆ 手作りコーナー

-ワラ細工、ハタ織り-

- 開催日 8/25(日)
- 9/22(日)
- お申し込み 当日入園の方、先着60名様程度
- 会場 旧作田家住宅前

催し物の案内

◆ 手作りコーナー

-竹細工-

- 開催日 10/27(日)
- お申し込み 当日入園の方、先着60名様程度
- 会場 旧作田家住宅前



----- 年中行事の展示 -----

◆ 盆行事 <8月中>

オショウロウダナなど川崎周辺のお盆の様子を展示。

◆ 十五夜 <9月中>

お団子や里芋、すすきなどをお供えます。

◆ 刈りあげ <10月中>

新しく刈り取った稲を神様にお供えし、その年の収穫を感謝する行事です。



園の動き

◆ 『日本民家園まつり』開催 <5/2~31>

期間中は、恒例の民俗芸能公演をはじめとして、様々な催し物を行いました。芸能公演は残念ながら雨天の中での開催となってしまいましたが、多くの方に熱演をご覧頂けました。

◆ 民具づくり教室-竹細工-開催 <6/2, 9, 16>

◆ 手作りコーナー-ワラ細工、ハタ織り-開催<6/23>

◆ 第一回民家園協議会開催 <7/19>

◆ 手作りコーナー-竹細工-開催 <7/28>

◆ 人事異動 <5/1> 渡辺美彦主任が教育委員会、社会教育部文化課に文化財係長として転出し、代わって川崎市民ミュージアムより小坂広志副主幹が着任致しました。

◆ 人事異動 <7/1> 財団法人文化財建造物保存技術協会より大野敏技術職員が着任致しました。

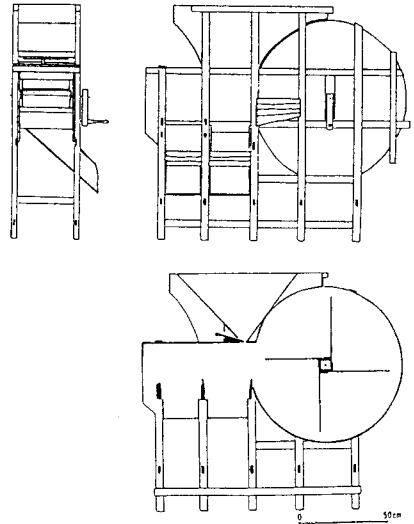


民家園まつり-民俗芸能公演
雅楽-高田興禅寺雅楽会

展示民具の紹介(3) — 唐箕(とうみ)、その起源について —

日本民家園が所蔵している唐箕の中に、江戸時代の年号を記したものがあります。そこには「文久三亥七月吉日」という文字が明確に記されています。このような年号が記された民具は、唐箕だけに限らず万石通し、穀櫃、幕箱、膳箱等にもよく見られますが、ここでは、この唐箕に焦点を絞った話題で展開していくことにしましょう。

唐箕は、人工的に風を起こし、その風力によって穀物の良い粒と悪い粒とを選び分ける農具です。この唐箕の起源は、その名称が示すように中国から伝わってきたものです。唐箕が中国の文献に出現するのは、北宋の時代(960~1127年)です。日本の時代区分に当てはめるならば平安時代の末期となります。それでは日本の文献に唐箕が出てくるのは何時の頃でしょうか。それは、江戸時代の初期、貞享元年(1684年)に発行された『会津農書』に記載されたものです。そこには「今、^{ようせん}鷗扇(とうみ)仕うはまれに有り」と記されています。わが国の文献に唐箕の図が初めて出でくるのは、それから約30年後の正徳3年(1713年)に発行された『倭漢三才図会』^{わかんさんさいずえ}です。



民家園所蔵の文久3年銘の唐箕

このように文献から見えていくと、唐箕の起源は、今からおよそ700年前に遡ることができ、日本に伝播された時期は、それから遅れること約370年を経た江戸時代の初期、徳川五代目の将軍・綱吉の時代に入ってきたこととなります。

さてそれでは、現存する実物の唐箕は何時頃まで遡ることができるのでしょうか。現在、各地からの報告を集計してみますと、江戸時代の年号を有する唐箕は、40点ほどあります。その内で、一番古い

編集後記

夏、真っ盛り。蝉は元気に鳴き、オニヤンマ、アゲハ蝶は、思いっきり飛び回って、この時期を精一杯、生きています。そうしているのも束の間、次第に秋の気配も窺われてきます。そのような中、訪れる季節を身体に感じながら、民家園に散策にいらっしやるのもいかがでしょうか。楽しい催し物を計画して、お待ちしております。(K)

唐箕は、京都で発見された明和4年(1767年)のもので、これは、先の『会津農書』から80年を経過したものが存在することになるわけです。試みに、日本民家園の文久年間の唐箕の古さをランクづけると、日本では35番目、東日本では17番目となります。もっともこの唐箕は茨城県笠間市のもので、県内では2番目に古い唐箕ともなるわけです。残念なことには、神奈川県内からは未だ江戸期の年号を有する唐箕は発見されていません。今後の調査いかんでは発見される可能性があります。

かつては、農家ではなくてはならない用具として、大事に使用されていた唐箕は、農作業の機械化が進むにつれて今では不要のものとなり、消え去ろうとしています。江戸時代には、この唐箕の無い家には娘をお嫁に行かせない家もあったという記録も残っています。唐箕は、農家にとって大切な三種の神器の一つでもあったのです。